

# 〈語り手〉の造形と一回性の poésie ——「無常といふ事」の成り立ち—— 小林秀雄におけるアランの受容について（Ⅲ）

小川 亮彦

## はじめに

昭和17年から18年にかけて、小林秀雄は、「當麻」「無常といふ事」「平家物語」「徒然草」「西行」「實朝」などの日本古典に関する批評的エッセイを書く<sup>(1)</sup>。もちろん、一見、孤独な沈潜とも思えるこの営みは、太平洋戦争開戦時という歴史状況に対する独特の異義申し立てと受け取ることも可能かもしれない。思想的な意味は別として、はっきりしているのは、これらが小林の批評史において〈日本〉の発見であり、〈歴史〉への回帰であることを特徴づける作品群である点である。こうした一連のエッセイでは、この時期以前の初期批評にみられた〈ヨーロッパ文学（文明）受容と文芸時評とのアマルガム〉という定式はきれいに消えている。では、以後二度とヨーロッパ文学に戻らなかったのかというと、けっしてそうではない。決定的回帰、というよりも、〈日本の古典を発見〉した時期というぐらいが妥当であろう。

むしろ、ここで重要なのは、昭和初期から始まる小林の初期批評の散文のスタイルがこれらの作品で完成した、そしてそれ以後そのスタイルはほとんど変容していない、という点である。そうすると、〈小林の散文の様式確立に及ぼしたフランス文学の影響〉という研究軸を設定する者にとって、これらの作品を考察するのは必須の作業になってくる。これらの作品の表面にはいかなる〈フランス文学〉の記号も見出せない、という事実に惑わされないようわれわれは心せねばならない。

本論文では、〈小林の散文におけるアラン的要素と、非アラン的要素の対立〉という視点を中心にして、代表作のひとつ「無常といふ事」の成り立ちを探ってゆく。これによって、小林の批評を貫く〈散文の論理〉の構造の一端があきらかになろう。なお、本論文は、ふたつの拙論「翻訳、そして、散文の論理——小林秀雄におけるアランの受容について（Ⅰ）」「初期文芸時評とフランス文学——小林秀雄におけるアランの受容について（Ⅱ）」<sup>(2)</sup>での論考を前提としていることをお断りして

おく。

## 1. アラン翻訳と日本古典の発見

小林の日本古典の発見は、フランス文学翻訳という作業自体がひとつの契機となっている事情は、すでに二宮正之が「小林秀雄と訳すこと」という文章で指摘している<sup>(3)</sup>。二宮の論の重心は、後期の大作『本居宣長』と『徂徠』との関連にあるので、ここではひとまず措いておく。

先の拙論でも触れたように、小林が翻訳観をまとめて披瀝している文章はふたつあって、ひとつはランボオ翻訳に関係してのもの。もうひとつは、アラン翻訳をその場としたものである。以下に、それらを抽出してみる。

〔ランボオ〕「翻譯」<sup>(4)</sup>

- ・「愛讀するだけでは我慢がならぬから翻譯する」
- ・「愛讀するとは原著者に自分の個人的な様々の勝手な想ひを託する事であり、翻譯するとは、さういふ想ひを表現するのに、原著者を模倣してみるといふ事だ」
- ・「外國語がどんどん普及して來ると、ただ忠實な逐語譯なら誰にでも出來るといふ事になるだろう。(中略) 語學さへ達者なら、翻譯など誰にでも出來るといふ様な時期は、早く過ぎて貰はねば、どうも面白くない」

〔アラン〕「アラン『大戦の思い出』」<sup>(5)</sup>

- ・「(岡倉正雄訳、アラン『大戦の思い出』を批判して＝筆者註) 誤譯しやうもない處に現れる譯者の誤譯といふものには、(中略) もう語學とか注意力とかばかりでは片附かぬものがある。そこには、アランならアランといふ人の文章に關する一種の眩ひの様なものがある」
- ・「僕等の注意力は、いよいよ原文の獨特さ掛け替へのなさといふものに、どう仕様もなく、僕等を引摺つて行くものだ」
- ・「原文の掛け替へのない鮮やかさは、讀む人の注意力に比例する。原型に囚われずに自由に譯そうとするその同じ苦心が、原詩の拘束といふものを明らかにするのである」

どちらも、翻訳の苦勞を充分に経験した小林の翻訳観を正直に告白していると思われるが、〔ランボオ〕のほうでは、「翻譯」は「愛讀」の必然として生じるものであり、「翻譯」は「原著者の模倣」なのだと言い切っていることが重要である。これは、小林の最初のランボオ論「ランボオⅠ」がランボオ翻訳に示した執着心の結果であり、また、ランボオの原詩の模倣そのものとみなせる点にあきらかである。

これに対し、〔アラン〕のほうは、翻訳についての反省意識がはっきり現れている。翻訳作業において、翻訳者小林の裡にどんな思考の運動が強いられるか、もっと小林の内面に即していえば、創造に行き着く前に、〈原文〉はどういう抵抗力を持つのか、が明示されている。その実際は、『アラン——精神と情熱に関する八十一章』における小林の翻訳性向分析に示したとおりであるが<sup>(6)</sup>、上に示した翻訳観は、文学テキスト一般に対する小林の態度をも説明し得るのではあるまいか。小林の翻訳観は、「アラン『大戦の思い出』」のなかで、次のように進展していく。

「(外国人の詩を十分に味わうのは難しいという)事情は、何も外國の詩の場合に限らぬ事で、同國人のものでも、時代が非常に隔たれば、同じ困難が現れてくるだらう。」<sup>(7)</sup>

そして、この後に、源氏物語や万葉集の理解が、フランス文学の翻訳と同様の構造を我々に強いる、という言及が続く。結局、翻訳におけるフランス語原文と、日本古典の原テキストは、そのどちらもが、

「(彼らの精神に注意を向けると)獨特の身振りによるより他に生きやうがない彼らの思想の姿に面接する想ひがする。(中略)一般化とか普遍化とかいふ理解の方法などは、全く無力なものと痛感する。さうなると、思想と呼ばれてゐるものとても、詩と酷似したものであり、換言も要約も不可能であり、又、不可能で一向差し支へないといふ面貌を呈するものだ。」<sup>(8)</sup>

と、同一のものとみなされて、小林の眼前に現れてくる。

「換言も要約も不可能」なゆえに、そうしようとはしない態度は、アラン翻訳の後記がおそろしく素っ気ない点などに見て取れ、「無常といふ事」のなかでも、その散文の特質のひとつとなっているのだが、これは後述する。

アラン翻訳での経験がそのまま日本古典読解に適用され、古典テキストが、〈事物〉として立ちのびだかったフランス語原文の如くに、小林の前に出現してくる仕組みが、ここにははっきりしている。初期の時評的批評がその見掛けと異なって、フランス文学受容の地平に営まれている事情の一例は、すでに「ナンセンス文學」の分析で示した<sup>(9)</sup>。また、同時代の文壇裁断としての「私小説論」<sup>(10)</sup>が、ジイドの小説方法論に対する理解の深浅を基盤にしたものであることもよく知られているとおりである。初期から昭和10年代中期は、小林が文芸〈時評〉から、つまり同時代の日本文学から離脱する過程でもある<sup>(11)</sup>。やがては「無常といふ事」の古典発見に達するこの過程を促した大きな契機が日本文学ではなく、アラン翻訳に代表されるようなフランス文学翻訳の作業であったことは注意しておいてよい。アランの著作は、新聞や雑誌のコラムにその根を持っていながら、同時代のフランス文学をほとんど扱わず、そこに頻出する名は、バルザック、スタンダールであり、また、デカルト、

パスカル、スピノザであるという事実も、ある面では小林に作用したかもしれない。しかし、アラン翻訳の作業のなかで、アランの散文自体があたかも〈古典〉テキスト的な信頼感と抵抗力を小林に感じさせたことこそ、「無常といふ事」の執筆を導く大きな要因だったのではあるまいか。

以下、以前の拙論で示した「オリムピア」考察と同様の方法を適用して、「無常といふ事」のテキストの構成と、そこを貫く〈散文の論理〉を見てゆく<sup>(12)</sup>。

## 2. 「無常といふ事」の主題

『一言芳談抄』の一節をめぐる論考、という形態による「無常といふ事」は、約2500字、7段落からなる、自在さを感じさせる随筆である。テキストの構成は、日本古典文学解説、歴史学批判という二重構造の下に、小林一流の〈批評〉を展開したものである。

〈日本古典文学解説〉

- ・第1段落『一言芳談抄』の引用
- ・第2段落「一言芳談抄のなかにある文を読んで、いい文章だと心に残つた。」
- ・第3段落「一言芳談抄は、恐らく兼好の愛読書の一つだつたのであるが、この文を徒然草のうちに置いても少しも遜色はない。」
- ・第5段落「『古事記傳』を読んだ時も、同じ様なものを感じた。解釋を拒絶して動じないものだけが美しい、これが宣長が抱いた一番強い思想だ。解釋だらけの現代には一番秘められた思想だ。」

前半のこれらの言及から転調して、後半は次のように進んでいく。

〈歴史学批判〉

- ・第5段落「歴史の新しい見方とか新しい解釋とかいふ思想からはつきり逃れるのが、以前には大變難しく思へたものだ。(中略)歴史といふものは(中略)新しい解釋などでびくともするものではない、(中略)さういふ事をいよいよ合點して、歴史はいよいよ美しく感じられた。」

第6、7段落は、この延長上に、「記憶」するのではなく、「上手に思ひ出す」ことの重要性が語られることになる。

- ・第7段落「上手に思ひ出す事は非常に難しい。だが、それが、過去から未來に向かつて餡の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想(中略)から逃れる唯一の本當に有効なやり方の様に思へる。」

「オリムピア」がけって映画批評ではなかったように、「無常といふ事」もまた、『一言芳談抄』の分析などではなく、あるいは、「歴史学批判」さえも越えている

といってよい。標題または表層と実質的な批評的主題との、こうした乖離は、小林の大多数の著作に見られるのとまったく同様である。さて、このテキストの細部を見てゆこう。

### 3. 逆説表現の振動

まず、マイナス評価を与えられる語群とプラス評価を与えられる語群との差異は、次のように整理できる。

#### 〈マイナス評価〉

- ・「僕は決して美學には行き着かない。」(第3段落)
- ・「歴史の新しい見方とか新しい解釋とかいふ思想」(第5段落)
- ・「過去から未来に向つて飴の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想」(第7段落)  
(傍線筆者。以下、本論文中、傍線はすべて筆者による)

#### 〈プラス評価〉

- ・「(歴史のなかの人間という) 動じない美しい形」(第6段落)
- ・「(大切なのは) 心を虚しくして思ひ出す事」(第6段落)

否定的対象が観念的表現に傾き、肯定的対象が柔らかな詩的な表現によって支えられているようすは、「オリムピア」の場合とまったく同様である。これらを下敷きにして、文脈は、次のような逆説表現が連続してゆく。

- ・「(歴史の新しい見方とか新しい解釋とかでなく) 歴史といふものは、見ればみるほど動かし難い形と映つて来るばかりであった。」(第5段落)
- ・「川端康成さんにこんな風に喋つたのを思い出す。(中略)『生きてゐる人間などといふものは、どうにも仕方のない代物だな(中略)、鑑賞にも観察にも堪へない。其處に行くとなんでしまった人間といふものは大したものだ(中略)、まさに人間の形をしているよ。』」(第5段落)
- ・「記憶するだけではいけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう。」(第6段落)
- ・「上手に思ひ出す事は非常に難しい。」(第7段落)

小林の逆説表現の構造が、アランの散文のそれとどう類似しているか、言い換えれば逆説表現を小林自身がどう認識していたか、ということはすでに指摘した。ここで典型例を説明するなら、「歴史」という語を説明する述部の部分の逆説的変動が注目される。すなわち、歴史は「新しい見方とか新しい解釋とかでなく」と否定し、「見ればみるほど動かし難い形と映つて来る」と肯定してゆくことで、「歴史」という語の通常の解釈を異化し、その真の価値の見直しを促しているといえよう。

また、「記憶するだけではいけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう」の部分では、「記憶」と「思ひ出す」という語に関する、通常感覚を逆転させているのだが、この逆説は、思想とは絶えず問い直され、生き直さねばならぬという主張を展開する『アラン——精神と情熱とに関する八十一章』の次の部分がそのまま対応している。

「世人は、石屋が石を置くように、思想を置きっぱなしにしたがるものだ。が、思想の記憶というようなものはこの世にない、言葉の記憶があるだけだ。だから常に証明を新たに見つける必要がある。また、そのために疑う必要があるのだ。」<sup>(13)</sup>

したがって、「無常といふ事」の中心部分は、アランの思想の延長上にあるのは間違いない。

さらに、「無常といふ事」一篇は、アランに即していうなら、『一言芳談抄』の一節にかかわって「言葉の記憶」を手にした小林が、それをどのように「思想の記憶」に変容しようとしたか、「上手に思ひ出そう」と努めたか、を思索したエッセイであるといっていよい。そうして、このことはつまり、文学の表象についての批評的主題そのものが、一篇の批評的エッセイのなかで実際に演じられ検証されるという、アランの散文のテキストが抱え込んでいる二重性を、日本古典の批評という場においてもはっきり示しているのである。これはまた、「オリムピア」等のテキストにも共通する現象である。

この一篇の最大のキーワードは、結語に登場する「無常」、「常なるもの」を別とすると、「思ひ出す」である。散文のすべての結構は、「思ひ出す」ことの可能領域の拡大に向かって動員されているともいえる。逆説表現の振動の渦中において新たに付与される「思ひ出す」ことの価値は、語り手の個人体験と批評する事象を連結する基底語となっているのだが、これについては後述する。

#### 4. 否定文と強調構文

「オリムピア」で検証した、「いくつかの否定文＋〈～なだけだ〉」の表現、アランのフランス語散文で言えば「いくつかの否定文＋〈ne A que Bの強調構文〉」の表現は、「無常といふ事」では、次の二箇所が相当する。

〔文例1〕「(北叡山で、突然、『一言芳談抄』の一節を思い出したことが) どのような自然の諸条件に、僕の精神のどのような性質が順應したのだらうか。そんな事はわからない。(中略)僕は、ただある 充ち足りた時間があつた事を思ひ出して ゐるだけだ。」(第4段落)

〔文例2〕「思ひ出となれば、みんな美しく見えるとよく言ふが、その意味をみんなが間違へてゐる。僕等が過去を飾り勝ちなのではない。過去の方で僕等に餘計な思ひをさせないだけなのである。」（第6段落）

前半の第4段落までは、「一言芳談抄の一節を思い出す」という個人的な体験を語り、第5段落から一転して、「歴史」をどう捉えるかという本題に入っていくのがこの一篇の構成であるのだが、上の〔文例1〕〔文例2〕はそれぞれ前半と後半の中心に配置されている。文脈におけるその位置と、説明を省いた断定的で高踏的な裁断口調は、「オリムピア」における文脈の構造と効果とにまったく同一である。そこにはアラン翻訳作業の明確な痕跡が認められるといつてよい。

## 5. 批評開始前の〈語り手〉の個人体験

全12段落の「オリムピア」では、前半6段落が映画「オリムピア」の映像についての記述であり、第7段落からは一転して言語芸術論になっていた。これは、前半が個人の具体的体験、後半が〈批評〉になっているとみなしてよいだろう。「無常といふ事」も同様であって、前述したように、前半4段落が個人的な体験、後半3段落が歴史学批判になっている。また、「オリムピア」では、逆説的表現の結語「（映画を見終わって、映画館を出たとき、目に入ってきた）人だかりは、肉體を紛失した者の魂の様に見えた。」が、冒頭の「肉體といふものは美しい。」という文に読者を返らせて、そこに静止させるようすを指摘したが、その辺は「無常といふ事」も同じである。つまり、〈無常〉に関する逆説的な結語である

「現代人には、鎌倉時代の何處かのなま女房ほどにも、無常といふ事がわかつてゐない。常なるものを見失つたからである。」

が、その余りの逆説ゆえに、読者を再び冒頭の「なま女房」の様子を描写した『一言芳談抄』の一節に連れて行くのである。結局、「オリムピア」と「無常といふ事」の全体の読解システムはほぼ等しい。だが、その等しい構成そのものにおいて、この二作品には、重大な差異のあることを見逃してはならないだろう。

「オリムピア」では、全段落は、「鐵の丸」の修辞系によって、見事に連続していた。しかもその連続は安定していたといつてもよい。これに対し、「無常といふ事」では、段落間を連結するのは「思ひ出す」という語の振幅であり、これは次のように展開していく。

〈前半〉

「（実際に比叡山を歩いていたとき、突然『一言芳談抄』の一節を鮮やかに想起して）ひどく心が動き、（中略）あやしい思ひがしつづけた。」（第2段落）

「(この文を書いている今は、あの比叡山を歩いていたときに)ただあるうち足りた時間があつた事を思ひ出してゐるだけだ。」(第4段落)

「無論、今はうまく思ひ出してゐるわけではないのだが、あの時(比叡山を歩いていたとき)は實に巧みに(『一言芳談抄』の一節を)思ひ出してゐたのではなかつたか。」(第4段落)

〈後半〉

「思ひ出となれば、みんな美しく見えるとよく言ふが、その意味をみんなが間違へてゐる。」(第6段落)

「思ひ出が僕等を一種の動物である事から救ふのだ。記憶するだけではいけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう。多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしてゐるので、心を虚しくして思ひ出す事が出来ないからではあるまいか。」(第6段落)

「上手に思ひ出す事は非常に難しい。」(第7段落)

個人的体験である前半の、肯定的に描かれる「思ひ出す」記憶の周りには、

「(比叡山での経験が)取るに足らぬある幻覺だったと(中略)考へて済ますのは便利であるが、どうもさういふ便利な考へは信用する氣になれない。」(第2段落)

「(比叡山では)確かに空想なぞしてはゐなかつた。(中略)餘計な事は何一つ考へなかつた」(第4段落)

等の、「思ひ出す」と対立する否定的表現が瞬時に結集されている。「思ひ出す」という語の周辺のこのような密度の高さから言つて、前半の体験が後半の歴史学批判としての「思ひ出す」を準備する助走となっていることはあきらかである。実際、前半の4段落だけを切り離して、独立した文として読んだ場合、「思ひ出す」という語に関する過度の緊張は甚だしい。修辞系を支配するキーワードを覆う、このような一種の過剰性は、実は「オリムピア」には見られないものである。「オリムピア」におけるキーワード、つまり砲丸投げの「鐵の丸」は、アラン流の〈思考に抵抗し、思考を鍛える事物〉として、一篇のなかで自然に発生し、やがては、小林自身の〈散文〉の問題の象徴へと無理なく移行していった。しかし、映像を通してであるとは言え、「鐵の丸」が本来の〈事物〉であるのに比して、「思ひ出す」は一義的には〈事物〉ではない。

「無常といふ事」で、「オリムピア」における「鐵の丸」の役割を担っているのは、冒頭の『一言芳談抄』の一節である。その一節が、〈思考に抵抗する事物〉として設定されているのである。アラン翻訳のなかの事例で、〈事物に即しての思考〉に関する部分はいくつか指摘したが、ここではアランの「修辞学の先生」と題された



一文のなかから、関係する部分を確認しておく。

「(引用された文句は) 思考の中心として働く。美は我々に考えることを促す。美しい詩句や格言を前にして、精神はこの絶大なる力を計る義務がある。注釈はけっしてもの名句に等価にはならないということが、原文の表徴のまわりに、動物の群れのように思考を集めるべきことを示している。」<sup>(14)</sup>

「オリムピア」においては、「原文の表徴」は砲丸投げの映像であり、〈肉體は美しい〉という発見であった。「無常といふ事」における「原文の表徴」は、文字どおり、『一言芳談抄』の一節であり、その周りに、これまた文字どおり「動物の群れのように思考が集め」られてはいる。しかし、「オリムピア」における「鐵の丸」の連続性とは異なって、『一言芳談抄』の一節と、一篇の批評的主題たる「思ひ出す」との間には、明確な断絶、ある種の審美的な跳躍が存在しているのである。「注釈するのではなく」というアランの勧めは、あまりに忠実に実行されているというべきか。

さて、そろそろ、引用されている『一言芳談抄』の一節——問題の「無常といふ事」の第1段落を見てみよう。

「『或云、比叡の御社に、いつはりてかなぎのまねしたるなま女房の、十禅師の御前にて、夜うち深け、人しづまりて後、ていとうていとうとつづみをうちて、心すましたる聲にて、とてもかくても候、なうなうとうたひけり。其心を人にしひ問はれて云、生死無常の有様を思ふに、此世のことはとてもかくても候。なう後世をたすけ給へと申すなり。云々』」

これに関して、小林の注釈は一切なく、第2段落で、

「これは、一言芳談抄のなかにある文で、讀んだ時、いい文章だと心に残つたのであるが、先日、比叡山で(中略)突然、この短文が(中略)心に浮び、文の節々が(中略)心に滲みわたつた。」

と受けて、それ以降は、比叡山で「思ひ出した」時点での経験と、「無常といふ事」を執筆している現在に「比叡山の経験」を思い出せないでいることとの差異に、論旨は進んでいく。

引用された『一言芳談抄』の一節が、注釈を必要とするような難解な文章ではないのは、岩波日本古典文学大系83「假名法語集」の解説<sup>(15)</sup>で見てもあきらかである。鎌倉時代に、「此の世の無常を悟った若い女が、後世の幸福を祈って、一心に鼓を打ち、歌っている」というにすぎない。むしろ、その内容があまりに単純であることのほうが意外である。しかし、「無常といふ事」というテキストの全体のコードを決定する、この引用の一節に関して、小林の注釈的な言及が皆無であるのは、やはり尋常なことではない。繰り返して言うが、このテキストの主題は、「思ひ出す」

ことを忘れて「記憶」に囚われている後半の歴史学批判であり、前半4段落の個人的体験は、その後半の「思ひ出す」を準備し、肉化するための過剰な結構なのである。そして、それは何故かくも過剰なのか。前半を構成している二者、すなわち、「そのまわりに思考の群れを集める」べき『一言芳談抄』の一節とそれを比叡山で「思ひ出」した個人的体験との間に感じられる、読者の側からの不連続性を補うために、この個人的体験の〈過剰さ〉が生じているのである。アランの『精神と情熱とに関する八十一章』や『プロボ』においても、スタンダールやゲーテの引用は頻繁に出てくる。もちろんそれらにほとんど注釈は付随していない。その意味では、アランの散文と同様に、古典テキストをめぐる小林の「無常といふ事」も、〈学〉(science)を拒否して、〈詩〉(poésie)に傾斜しているのはたしかである。しかし、アランの場合には、そのテキスト全体が引用句そのものを絶えず活性化していったはずである。これに対し、小林の「思ひ出す」という〈詩〉(poésie)は、過度に特殊なものとしてテキスト内に存在し続けているのではあるまいか。ここに小林の、アランからの本質的な離脱が指摘できる。そしてこの事実、小林の批評的散文において、〈語り手〉像がどのように形成されているか、をもう一度検証するように要請するのである。

## 6. 〈語り手〉の具象性と〈批評〉の抽象性

「オリムピア」では、〈仮構された患者〉によって〈語り手〉がある特権的な位置に後退し、あるいは上昇していく事情を考察した。つまり、小林の批評テキストではいつも、語り手＝実在の小林なのではない。すなわち、その批評テキストは一種のフィクションとしての側面を持っているということである。テキスト分析からは、ややはずれるが、「當麻」では、最後に「雪の夜道をひとりで帰った」と語られているが、「當麻」を観た当日の事実は、中村光夫が同行しており、帰り道の実際の状況がテキスト「當麻」に昇華するようなものでなかったことは、よく知られている。このような批評テキストの〈物語化〉は、程度の差はあれ、小林の散文に常に指摘し得るだろう。

「無常といふ事」の主題、歴史学の批判としての「思ひ出す」ことの重要さは、〈学〉の批判である以上に、思想の問題であって、したがって抽象的な問題である。しかし、これを〈抽象性〉に止まらせてはおかないぞというのが「無常といふ事」全体の基調である。繰り返しておこなわれる「記憶」と「思ひ出す」こととの対句の変容が、それを如実に語っている。歴史というものを、身体性に依拠した「思ひ出す」のレベルに引き戻すことが小林の願いなのである。

では、主題の抽象性保持と、抽象性からの離脱（＝具象性回復）を同時に可能にするために、テキストでは何が動員されるのか。〈語り手〉の具体的な事実、しかも、「換言不能で」かつ重い経験に昇華し得るような事実なのである。これが、前半の4段落における、個人的な体験「思ひ出す」の過剰なのである。まず、比叡山で一度は、件の一節をしっかりと「思ひ出」したこと、次に、後になってこの「思ひ出」した事実を追体験することがいかに難しいかを感じ、「上手に思ひ出すことは難しい」ことを知ったこと。執拗に語られるこの構造の具象性が後半の歴史学批判に肉体を付与しているのである。

比叡山で一節を思い出し、そこから思考を発展させて、歴史学批判まで行き着いたというのが、事実でないことはないだろう。だが、短文の裡に歴史学批判を可能ならしめる極めて緊密なこのテキストをつくり出した作者は、テキストの背後でテキストを統括しているのであって、〈語り手〉のように素直で従順であり続けているわけではない。後半の歴史学批判のなかにおいてなお「川端康成に喋った」事実が動員されているのは、それが事実であるか否かに関係なく、主題の具象性回復のためのあくなき手段である。

「オリムピア」においては、このような〈語り手〉の正面への強化、いわば、〈語り手〉の〈物語化〉は見られなかった。二つのテキストの間のこの差異は何故か。もう少し考察を進めてみよう。

## 7. 読解のシステムと一回性の poésie

「無常といふ事」の構成を再び確認すると、第1段落の『一言芳談抄』の一節がテキストのコードを規定し、第7段落の結語にあたる

「現代人には、鎌倉時代の何處かのなま女房ほどにも、無常といふ事がわかつてゐない。常なるものを見失つたからである。」

という一節が、第1段落を受けて、批評文として十全に閉じていると考えられる。しかし、先に指摘したように、この〈無常〉と〈常〉に関する逆説的な結語が、その逆説性ゆえに、第1段落への再帰を読者に要請する。そして、第1段落の一節についての注釈が一切ないために、読者は第2段落へと進み、そのなかの一節

「これは、一言芳談抄のなかにある文で、讀んだ時、いい文章だと心に残つたのであるが、先日、比叡山で（中略）突然、この短文が（中略）心に浮び、文の節々が（中略）心に滲みわたつた。」

と語られる時点で、読者の思考は静止させられるのである。あるいは、テキスト全体が、この「心に滲みわたる」時点で収斂し、この時点で結晶化するというべきか

もしれない。このような「無常といふ事」の読解のシステムは、用心深く見てみると、「オリムピア」とは異なっている。「オリムピア」では、その結語「人だかりは、肉體を紛失した者の魂の様に見えた。」が、読者を、冒頭の「肉體といふものは美しい。」という文に返らせて、そこに静止させるようすを指摘したが、「肉體といふものは美しい」の一句がテキスト内で宙吊りになっているわけではない。つまり、読者はそこで迷い始めはしないのである。前述したように、「鐵の丸」の修辞系が一定の連続性を保って丁寧に文脈を支配しているからである。

これに対して、「無常といふ事」の「いい文章で、心にしみわたった」という事実は、〈語り手〉の特権的な経験であって、再検証可能な事象としては、すなわち〈学〉(science) のコードとしては、提出されてはいないのである。つまりそれは〈一回性の詩的経験＝poésie〉とでもいうべきものである。ここに第1段落と第2段落以降との間の、散文の論理としての決定的な断絶が認められる。小林も、この断絶を軽んじてはいない。その証しが前半の4段落における〈語り手〉の過剰な〈物語化〉なのである。これは、「(一節が) 心にしみわたった」という審美的な空隙を越えて、その経験の実在性の強調の裡に読者を歴史学批判まで引っ張っていくための必須の行程なのである。小林のこの方法は、はたして成功しているだろうか。あらゆる詩篇が読者を選別していくのとまったく同じ意味において、小林の散文は読者を選び取っていくのだが、それは彼の〈詩〉(poésie) の型の、そして結局は、批評の方法の必然であろう。

ここで、『精神と情熱とに関する八十一章』の翻訳性向で考察した、アランと小林の散文の相違を思い起こしてみたい。アランの散文にはいつも〈曖昧さ〉あるいは〈遊び〉があることは指摘した。また、小林はアラン翻訳において、原文の〈遊び〉の部分を追いつめ、それをなんらかの断定口調によって固着しようとする傾向があることも考察した。小林の批評テキストには、結語あるいは中心部において〈遊び〉はまずない。常に言い切ろうとする態度はその散文ではっきりしている。主題が一篇毎に異なるという意味ではなく、たとえば「無常といふ事」を昭和16年の「歴史と文學」に比較して読むのは容易であるのだが、「無常といふ事」一篇はあくまで完結した構造を持っているのである。小林のそういう完全性に対する強い指向が、特権的でしかあり得ない彼自身の〈一回性の poésie〉の保存という希求と衝突したとき、批評テキストにおける審美的な空隙が生じるのである。この意味で、「無常といふ事」は小林の批評テキストの特質をもっともよく表しており、また、彼の批評作品のひとつの完成なのである。

アランの散文には、小林のような審美的な空隙はない。それは、〈一回性の poésie〉を否定したからでなく、「完全性」を求めなかったからである。アランの散文は決

して終結しない。そして、その結語によく見られるような不完全性ゆえに、poésieの〈一回性〉が一篇毎に常に再起していくのである。アランの散文には、どの一篇にも、不完全性ゆえの〈開放性〉があるのに対し、小林の散文は、ほとんどすべてが〈開放的〉ではないといってよい。二人の作品は、その〈散文の論理〉において類似した構造をもっていることは、すでに考察したとおりであるが、〈開放性〉の濃淡が両者をはっきりと別のものになっている。

もちろん、「無常といふ事」のような空隙は「オリムピア」には見られない。小林の多くの散文は、「オリムピア」のような安定した様式と、「無常といふ事」のような完全性と空隙とが反立した様式との間を行き来しているのだが、後者の様式がより支配的であるのはあきらかであろう。

## 8. 〈語り手〉の物語化と「突然」の意味

〈語り手〉の物語化に関係した要素を、もうひとつ考察しておく。小林の作品では、しばしば、事は「突然」起きる。有名な「ランボオⅢ」の冒頭には、次のようにある。

「僕が、はじめてランボオに、出くはしたのは、廿三歳の春であつた。その時、僕は神田をぶらぶら歩いてゐた、と書いてもよい。向かうからやつて来た見知らぬ男が、いきなり僕を叩きのめしたのである。」<sup>(16)</sup>

また、「モオツァルト」の印象的な一節には、以下のようにある。

「僕の亂脈な放浪時代の或る冬の夜、大阪の道頓堀をうろついてゐた時、突然、このト短調シンフォニイの有名なテエマが頭の中で鳴つたのである。」<sup>(17)</sup>  
このような「突然」は「無常といふ事」にも二箇所ある。まず、第2段落で、

「これは、一言芳談抄のなかにある文で、讀んだ時、いい文章だと心に残つたのであるが、先日、比叡山で（中略）突然、この短文が（中略）心に浮び、文の節々が（中略）心に滲みわたつた。」

と使われ、また第5段落では、

「或る日、或る考へが突然浮かび、偶々傍にゐた川端康成さんにこんな風に喋つたのを思ひ出す。」

とも語られている。これらのテキストでは常に、啓示は〈突然〉やってくるのであり、再驗不能の一回性のものであるという意味では、先の〈一回性の poésie〉に通ずるものである。本当に啓示はかくの如く「突然」やってくるだろうかと問う必要もないだろう。これは、〈語り手〉の物語化を成立させる小林の定法なのである。表面的には詩的体験への信頼であり、テキストの論理としては、〈語り手〉にまつ

わる事象について、〈語り手〉自身が論理的な思考の無意味さを認め論理的追跡を諦念した、という表徴なのである。したがって、テキストの抽象的主題を具象的事象で支えるためにおこなわれる、この〈語り手〉の物語化自体のなかに、読者の論理的追跡を拒む要素が伏在していてもいるのであって、ここに〈語り手〉が仮構である事情が明確に露呈している。

テキストの中心部分に、しばしば、「ただ、～なだけである」の構文、フランス語の構文では「ne A que Bの強調構文」が登場することは、何回も指摘した。この構文は、その中身の重さのみならず、前後に説明を省略している点が重要なのであって、まさに「ただ、～なだけである」そのものは、テキストの論理的連鎖において〈突然〉登場する。小林がアラン翻訳を通して形成したと思われる、この〈散文の論理〉はもちろん、文脈を動かす主要因である。そして、〈語り手〉が「突然」啓示を得る局面の仕組みは、その〈散文の論理〉とさして隔たってはいない。つまり、具象性の最後の拠り所たる〈語り手〉の登場構造は、一篇のテキストを統括する〈散文の論理〉の変異体に過ぎず、その二者は極めて相同的なものである。こうした〈語り手〉の造形において、小林の散文は明確にアランの散文とは別の次元に足を踏み出しているのである。

## 9. 再び「無常といふ事」の主題について

「思ひ出す」をキーワードとしての歴史学批判が、この一篇の主題であることは確認したが、ここで第7段落をもう一度検証する。

「上手に思ひ出す事は非常に難しい。だが、それが、過去から未来に向かつて館の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想（中略）から逃れる唯一の本當に有効なやり方の様に思へる。」

「現代人には、鎌倉時代の何處かのなま女房ほどにも、無常といふことがわかつてゐない。常なるものを見失つたからである。」

傍線部を比べて読んでみると、小林の目指す〈歴史〉とは何であるかが浮かび上がってくる。「常なるものを見失」うことが「過去から未来に向かつて館の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想」であるならば、「無常」から「常なるもの」への回帰とは何であるのか。それは、つまり十全な意味においての「現在を生きること」なのではないか。

先に示したアランの次の一文、

「思想の記憶というようなものはこの世にない、言葉の記憶があるだけだ。だから常に証明を新たに見つける必要がある。また、そのために疑う必要があるのだ。」

が、思想が思想であるためには、それを現在において生き直すことによってでしかない、という事情を示しているのはあきらかである。小林の目的とする〈歴史〉が古典への推参と表裏一体なのは、〈歴史〉とは現在を生きることであり、〈事物〉としての古典が、われわれの現在を定着させるからなのである。

アランの『精神と情熱とに関する八十一章』や『プロボ』における思想の根底が、「あらゆる思考と行為の、現在への絶えざる回帰」であることはすでに指摘した。アランにおいては、認識の誤謬とは、詰まるところ、〈現在〉を捉えることの誤謬に等しいことが繰り返し語られているのである。ここに、小林における、翻訳を通してアラン受容と歴史認識および古典回帰とを結ぶ重要な伏流が隠れているのである。

翻訳作品が原テキストに対してそうであるように、あらゆる批評作品は、方法がどうであれ、先行テキストに対して〈メタレベル〉に存在している。つまり、批評の創造性は〈メタフィジック〉としての属性と切り離せない。「オリムピア」から「無常といふ事」への散文の変容過程で、散文の論理の変化は別として、もっとも一貫しているのは、身体論的经验への信頼感である。これが、「無常といふ事」では、〈語り手〉の造形にまで及ぶのだが、こうした傾向は〈メタフィジック〉への執拗な反抗と言ってよいだろう。この〈アンチ・メタフィジック〉と「思考の現在」の回復への強い欲求が、小林の批評の〈散文の論理〉を支配しているものであり、それは、先行テキストに対して、批評テキストをいかに近接させ得るか、つまりは、〈二者の距離〉をいかにゼロに近づけるか、という遠大な冒険の系譜を形作ることになる。アランも小林も、〈学〉(science)の言説を志向していないのはもちろんであるが、アランにおいて、〈二者の距離〉はいつでも変容可能なもの、むしろ、一篇毎に変容させるべきものであったのに比べ、小林の批評の創造性は距離ゼロの涯をひたすら目指す。「美しいものは美しい」というような小林の批評テキストの同語反復的な危うい綱渡りこそは、彼の批評の最大の栄光なのである。

アランにおいて、その思想は〈散文の論理〉と切り離せない。小林においても、事は同様である。小林自身が、アラン受容、すなわち翻訳を通して自身の〈散文の論理〉形成のすべてを意識化していたはずはなく、ある面では、無意識的な受容であったろう。そして、アラン受容は当然ヴァレリイやベルクソンの受容と分かち難く絡みあっていただろう。しかし、いずれにしても、「ランボオⅠ」「ランボオⅡ」を契機として批評的出発をした小林が、すなわち、「文学の不可能を生き切ったランボオの後に何が可能か」を自らの課題としたはずの小林がどこに辿り着いたかの一端は、ここに考察したとおりである。そして、われわれは今、この地点から、再

び小林の〈ランボオ体験〉の位相を確定する作業<sup>(18)</sup>に戻らねばならない。

## 註

- (1) この六篇の初出は以下。

「當麻」—『文學界』1942(昭和17年)4月号 「無常といふ事」—『文學界』1942(昭和17年)6月号 「平家物語」—『文學界』1942(昭和17年)7月号 「徒然草」—『文學界』1942(昭和17年)8月号 「西行」—『文學界』1942(昭和17年)11月号～12月号 「實朝」—『文學界』1943(昭和18年)2月号, 5月号～6月号

なお、本論文中での「無常といふ事」からの引用部分は、「無常といふ事」—『新訂小林秀雄全集第8巻 無常といふ事・モーツァルト』新潮社 1978 pp.17-19.による

- (2) ①拙論「翻訳,そして,散文の論理——小林秀雄におけるアランの受容について(Ⅰ)」—『文学研究論集』第10号 筑波大学比較・理論文学会 1993 pp.29-52.

②拙論「初期文芸時評とフランス文学——小林秀雄におけるアランの受容について(Ⅱ)」—『文学研究論集』第11号 筑波大学比較・理論文学会 1994 pp.71-84.

- (3) 二宮正之「小林秀雄と訳すこと」—『文学』1992〈冬〉号(第3巻・第1号)岩波書店 pp.101-105.『文学』1992〈春〉号(第3巻・第2号)岩波書店 pp.81-90.

- (4) 「翻譯」—『新訂小林秀雄全集第8巻 無常といふ事・モーツァルト』新潮社 1978 pp.178-179.(初出は「創元月報第6号」1949.3月)

- (5) 「アラン『大戦の思い出』」—『新訂小林秀雄全集第7巻 歴史と文学』新潮社 1978 pp.101-103.(原題は「感想」で,初出は『改造』1940.1月号)

- (6) 前掲註(2)① pp.32-43.

- (7) 前掲註(5) p.103.

- (8) 前掲註(5) p.105.

- (9) 前掲註(2)② pp.72-75.

- (10) 「私小説論」—『経済往来』1935.5月号～8月号に4回連載。

- (11) たとえば,中村光男「解説」—『新訂小林秀雄全集第1巻 様々な意匠』新潮社 1978 pp.342.に以下のような見方がある。

「文壇の様相の變化につれて,氏もまた青年期のいらだたしい孤獨から脱け出して,同時代の生きた文学との接觸をつくりだそうとします。『文學界』の刊行がその具體的な現れです。ここで氏の守ろうとしたものが文学の一流派より,文学そのものであり,この特異な文学運動への参加が,ドストエフスキへの熱烈な傾倒を反面としたことは,この表面的な變貌が實は氏の青年期の主張の成熟であることを示しています。(中略)氏と文壇とは,いつもすれ違ひの形でしか交わりませんでした,これら短時間の交錯は,氏自身にも,時代の文学にも深い痕跡をのこしています。」

- (12) 「オリムピア」の考察に関しては,前掲註(2)① pp.44-49.を参照のこと。



また、本論文は、あくまで、「無常といふ事」の散文の動態を考察しているのだが、「無常といふ事」を、理念の表出の観点からでなく、その〈詩的な〉散文への傾斜を中心に読み取った最初の評論は、江藤淳のものである。

江藤淳『小林秀雄』講談社 1965 p.249. (初出は講談社 1961)

「最初にかかげられた『一言芳談抄』の一節が、この文章で小林が自らの筆に課している規矩である。彼は、いわばここで、『いつはりてかなんぎのまねしたるなま女房』の仮面をつけて、舞っている。が、その『仮面』が彼の肉体にはりつけられたというだけで、彼の手足がいかにそうでないときは異った動きかたをしはじめるか。つまり、彼の思想が言葉の単純な意味をはなれて、美しいかたちを描きはじめるか。『あの時、自分は何を感じ、何を考へてゐたのだらうか』それを概括しえないということが決定的なことだ。この美しさは修辞とは別のものである。そして、ここに語られている思想、たとえば、『歴史には死人だけしか現れて来ない。従って退つ引きならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ』という思想には、かつて繰り返し素顔の小林の口から出た同じ意味の言葉になかった新しい意味がつけ加えられている。それは音楽の意味に似たものであり、詩の意味に近づく。」

一方で、「当麻」と「無常といふ事」に共通の論理的な閉塞性について、それを徹底的に断罪する、由良の以下のような言及がある。

由良君美「『当麻』と『無常といふ事』」—『國文学』學燈社 1980. 2月号 p.115.

「『当麻』の結語は、修辞の見事さを証して完結である。すなわち、冒頭とおなじく僕は、再び星を眺め、雪を眺めた。」なのである。わたしは、この閉じられた宇宙で芸術作品も〈もの〉として問う、失語症の美学とは縁をもったことがない。／『当麻』にこだわりすぎたかも知れない。しかし、次章『無常といふ事』は、実はその構造において、『当麻』と全く同一なのである。」

「無常といふ事」の、いわゆる〈文体〉研究は、その多くが、江藤の判断と、由良の攻撃の間を行き来している。本論文の立場は、両者の論考のいずれにも与するものではないが、「無常といふ事」が小林の散文のひとつの〈完成形〉と見る点では、江藤および、由良と共通の判断である。

- (13) 引用した訳文は、小林秀雄訳『精神と情熱とに関する八十一章』東京創元社 1978 p.155. (初出は創元社 1936)

また、原文は以下。

Alain. '81 chapitres sur l'esprit et les passions'in *Les Passions et la Sagesse*. Bibliothèque de la Pléiade. Paris: Gallimard, 1960. p.1190. 'On voudrait les pouvoirs laisser en place, comme un maçon les pierres. Mais il n'y a point de mémoire des idées; mémoire des mots seulement. Il faut donc retrouver toujours les preuves, et encore douter pour cela.'

なお、原文の初出は81 chapitres sur l'esprit et les passions Paris: Gallimard, 1917.で、小林が翻訳の底本に使ったのは、1921年の再版である。

- (14) 引用部は拙訳。原文は以下。

Alain. 'Le Maître de Rhétorique' (Propos du 11 mars 1922) *Propos I* texte établi et présenté par Maurice Savin, Bibliothèque de la Pléiade. Paris: Gallimard, 1956. p.374.

'(...) qui sont comme des centres de méditation. Le beau nous somme de penser. Devant un beau vers ou devant une belle maxime, l'esprit est tenu de rendre compte de cet immense pouvoir; et, puisque le commentaire n'égale jamais le trait, c'est la preuve qu'il faut revenir et rassembler ses pensées, comme des troupes, autour du signe.'

- (15) 宮坂有勝「假名法語集」—『日本古典文学大系83』岩波書店 1964 p.204.
- (16) 「ランボオⅢ」—『新訂小林秀雄全集第2巻 ランボオ・Xへの手紙』新潮社 1978 p.152. (原題は「ランボオの問題」で、初出は『展望』1947. 3月号)
- (17) 「モオツァルト」—前掲註(4)と同書 p.75. (初出は『創元』第1輯1946. 12月)
- (18) 本論文での考察と関係した、小林の〈ランボオ体験〉の再検討については、拙論「小林秀雄の卒業論文「Arthur Rimbaud」——「ランボオⅠ」から「ランボオⅡ」への架橋」—『一般教育部論集第17号』山梨学院大学一般教育部(1995 2月刊行予定)を参照されたい。